

チツソ答弁書にショック

水俣病患者家庭互助会



答弁書提出後に記者会見する被告側（左から久我チツソ総務部長、橋本、塚本各弁護士）

「やっぱりそうだったか」

「過失はない」 会社の反論にガツクリ

「やっぱりそうだったか」二十日、被告のチツソが提出した答弁書の内容に水俣病被害者家庭互助会は少なからずショックを被った。被告側はチツソは全力をあげて反論するつもりと予想していたものの、改めて「過失はない」と言われて、訴訟だけでなく、水俣病補償処理委二任派さえ、一まつの不意をかくせなれている。

「正義はないのか」も動揺

水俣病対策市民会議の松本勉事務局長は「昨年の公審認定後には江頭社が被害者家庭を二軒二軒回り、あちまこで訪ねたではないか。裁判上の技術的問題はあるとしても、人命を尊重する道義的精神にかけている。もともと裁判所で生々しく争うような性質のものではない。もしチツソの言い分が逆るとすれば、この世に正義はない」と語った。

同会議は近く役員会を開き、チツソの強い態度に対抗して、患者家庭の結束をさらにいっそう強めるよう支援することを検討するといふ。

一方、水俣病補償処理委員二任派の山本亦由互助会会長は「チツソが反論して初めて裁判になるのだからなることは予想していた。だからわたしたちは処理委に一任したのだ。裁判は相手長くなるだろう。処理委にはチツソも患者家庭もたれがみても客観的な見出しをもちょうろ頼んでいる。処理委でももし裁判同様チツソが「責任はない」といふのなら大問題だ。だから裁判と処理委でのチツソの主張がどう関連しあうのか理解に苦しむ点もある。二日の上京するので、処理委でチツソがどの点についてどう意見を述べたのか聞いてみたい」と強硬はチツソ側の態度に不安をいだいた様子。

裁判における法律問題の処理の方針として打ち出されたものかどうかわかっている。よくに答弁書提出後会社が発表した説明書に

「一任の調停についても、追加補償のことは無い、いわゆる見舞い金契約に準じてすでに和解が成立しているを述べている点、一任派のショックは大きかったように、答弁書が提出されたこの日、水俣病はさまざまな原因が融合し、改めて公害紛争処理のむすかしを見せつけたようだ。」